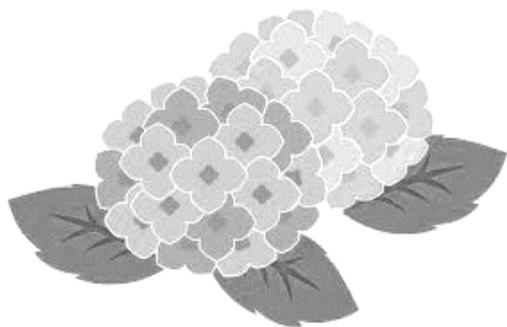


ほんばこ



No. **59**

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第59号（通巻第75号）

2019年6月27日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-6-2

日本教育会館5F

教育図書館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<http://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

- ・「わが子に期待」
内藤 奨 2～3p
- ・《 函 書 紹 介 》
『道徳教育と愛国心』～「道徳」の教科化にどう向き合うか～
大森直樹著 岩波書店 2018年9月刊行
紹介：佐々木 賢 4～5p
- ・最近の受入図書（2019年3月～2019年6月受入） 6～7p
- ・教育図書館のご案内 8p

「わが子に期待」

内 藤 奨

私の周りには幼いころから本がありました。子どもの頃の誕生日プレゼントは図書券でした。図書券できつちよむさんや一休さんの活躍するトンちの話を買っては何度も読みましたね。また、日本や世界の七不思議を読んで、ムー大陸や邪馬台国を探したいと夢見たこともあります。小学校の図書館にあった「ルパンシリーズ」では推理小説にはまりました。ルパンやホームズの活躍にどきどきしながらページをめくっていたのをよく覚えています。

中学生になると赤川次郎さんの「三毛猫ホームズ」シリーズを始めとして、たくさんの日本の作家さんの推理小説を読みました。その後は、重松清さん、有川浩さん、三浦しおんさん等々、たくさんの作家さんの本を愛読しています。その中で、人生で最初にハマった作家さんは村山由佳さんですね。自分の子どもに登場人物の名前を付けようと思ったくらいですから。そして、その次に（現在もですが）ハマったのが伊坂幸太郎さんです。

はじめての出会いは「重力ピエロ」でした。もう、その言葉の選び方というか、日本語でアメリカンジョークをとるか、ウィットに富んだ文章！伏線が物語中に張り巡らされていて、「えー！こんなところにつながるのー!？」というぐらい、すべてが最後一つにつながるところとか、読み始めたら一気に読みです。作品間のつながりもあり、全然関係ない作品のある一場面にだけ、他の作品の登場人物がいたり、何度も同じ本を読み返してしまうのも魅力の一つです。最近は憲法関係の本を買いに本屋に行くことが多いのですが、伊坂さんの新刊が出ているとついつい買ってしまいます。

私にとって本を読むということは、「自分の中にある答えを見つけること」です。今までたくさん本と出会いましたが、本を読んでいると、その中に自分の考えや気持ちを的確に表す答えみたいなものが潜んでいることがあります。その「あっ」と思う瞬間が私には魅力なのです。いつも適当に読んでいますが、本から得たことや、感じたことは、私の想像力を豊かにしてくれています。



最近も伊坂さんの本を買いました。「フーガはユーガ」を読み終わったと思ったらもう出ている！これは買わなくちゃ！ということで出会ったのが、「シーソーモンスター」。

この物語もおもしろかったのですが、中のチラシを見ると「螺旋プロジェクト」とある。早速特設サイトにアクセスしてみると、以下のような説明が。



8作家による壮大な文芸競作企画。3つのルールに従って、古代から未来までの日本で起こる「海族」と「山族」の戦いを描く。

- ルール1：「海族」と「山族」、2つの種族の対立構造を描く
- ルール2：全ての作品に同じ「隠れキャラクター」を登場させる
- ルール3：任意で登場させられる共通アイテムが複数ある

3月から7月まで毎月1～2冊の本が刊行される予定になっていました。作品はそれぞれ一つの物語として完結しているのですべてを読む必要はないのですが、伊坂さんが立ち上げに関わったプロジェクトとあれば全て読まなきゃ気が済まない。

ということで、現在までに刊行されている作品はすべて読みました。8作品すべて読み終わったら教育図書館に寄贈しようと思うので、年代順に読むのもよし、刊行順に読むのもよし、好きな作家さんのものだけ読むのもよしです！ その中の一つに、葉丸岳さんの「蒼色の大地」があります。螺旋プロジェクトの明治編です。「海族」と「山族」の対立を軸にしているのは他の作品と同じなのですが、海軍と海賊の争いの中で、互いに争う一族に生まれた運命に翻弄されながらも、その運命に抗い対立を乗り越えようとする者、大切な人を守るために疑問を感じながら争いに身を投じていく者、それぞれの思いが交差する形で物語は進んでいきます。

生きている以上どうしても相性の良くない人と出会ってしまいますよね。たいていの場合はその人と距離をとればいいのですが、そうはいかない場合もあります。「螺旋プロジェクト」に登場する「海族」と「山族」は、これ以上ないくらい相性が悪いのにどうしても出会ってしまいます。その対立の中で、相手の一族を滅ぼそうとするか、それでも一緒に生きていこうとするか、2つの一族の対立軸の中に自分の存在を見出していくのか。対立の対処の仕方は様々です。

現実を見ると、人類は何度も戦争を繰り返してきました。おそらくそのほとんどが多少の差異はあるものの「自国を守る」という名目のもと行われてきたのでしょう。日本も例外ではなく柳条湖事件を発端として、十五年戦争と言われる泥沼の対外戦争に突入していきました。十五年戦争は多くの国民の命を奪い、その何倍ものアジアの人々の命を奪ってきました。日本国憲法成立の背景には、多大な犠牲者を生んだこの戦争の経験があります。その後も憲法9条の下、自衛隊の再軍備を行っても「専守防衛」を貫き、軍事力で問題を解決しようとしないうる日本の基本姿勢は、国際社会の信頼を得てきました。現実世界を見れば、日本は

他国の武力に対して劣勢に立つことになります。そのことを自覚して、それでもなお、世界平和の実現を私たち国民に求めたものが憲法9条です。

先に紹介した「蒼色の大地」の中で、主人公の一人は避けられない運命があろうとも、それでも「争いのない世界」を追求します。憲法の9条の望む道筋は細いかもしれませんが、それでもその道筋を絶やさず追求し続けることが必要なのだと私は思います。私の二人の子どもたちに最初に買った絵本は、浜田桂子さんの「へいわってどんなこと？」でした。子どもたちがこれからもたくさんさんの本と出会い、その中で自分の考えを確立し、願わくはそれが「争いのない世界」への道筋に資するものであってほしいと期待します。

(日本教職員組合 中央執行委員)



教育図書館では、教職員組合史、組合刊行物、平和学習資料等の収集をしております。

ご寄贈いただければ、幸いです。よろしくお願い申し上げます。

教育図書館について

教育図書館は1966年10月1日、(財)日本教育会館の附設図書館として設立されました。教育関係図書を中心に、日本教職員組合結成以来の刊行物、全国教研集会報告書などのほか、国民教育文化総合研究所(略称教育総研、前身は国民教育研究所)の研究成果、教育学一般、教育実践記録などを重点的に収集、閲覧に供しています。

《 図 書 紹 介 》

『道徳教育と愛国心』

～「道徳」の教科化にどう向き合うか～

大森直樹著 岩波書店 2018年9月刊行



国は2018年度から小学校で、2019年度から中学校で「特別の教科である道徳」を検定教科書と評価を伴いながら実施する。その時その時の政権が人々に求めてきた道徳と、人々が生活と仕事の中で育ててきた道徳とは根本的に違う。前者は権力者の利害が関与するが、後者は生活に関わる道徳だからだ。「生活の中の道徳は必要だが、学校の中の道徳教育は必要ない」と著者は断言する。なぜ学校の中の道徳教育が必要ないのかを、国の政策過程と近現代教育史と人々の心情を勘案しながら論じているのが本書である。

政府が道徳教育の必要性を説いたのは、建前はいじめや少年非行への対処だが、本音は愛国心の育成にある。愛国心について、エリートに対しては、国際競争に勝つための「グローバル人材養成」を求め、ノンエリートには「お国のために命を投げ出しても構わない日本人を生み出す」ことにあった。「愛国心」の内容は国旗や国歌や天皇敬愛をも含んでいる。これでは戦前回帰ではないかと思われるが、事態は複雑になっている。1950年代に朝鮮戦争があり、2000年代に入り、米国を中心とした自衛隊海外派兵の要請が相次いだからだ。

第二次世界大戦直後の5大改革（男女同権・労働組合・教育と政治と経済の民主化）の一つである、教育民主化が行われたが、70数年を経た現状を見れば、民主主義とは程遠い。著者はなぜ民主

化が不毛に終わったかを、国会での討議応答資料、教育基本法や学校教育法と省令による施行規則等、詳細多岐にわたる資料から、「抜け道」という表現を使い、巧みに解説している。

抜け道1、誰が教育の目的を決定したかについて、教育勅語は君主（天皇）だが、実際には、当時の官僚が起草していた。教育基本法は立法府だが、起草したのは同じく官僚である。抜け道2、建前として地方分権であるから、地方公共団体の教育委員会が起草すべきだが、実際には、文部省が法案作成権を行使したから中央集権である。抜け道3、教育課程の内容と授業時数を決め、抜け道4、戦前戦中の学籍簿を「行動の記録」として継続し、道徳を評価の対象としたのは、やはり文部省と現行の文部科学省である。

1947年の教育基本法を巡る国会審議で、文部大臣は「この法案の中には教育勅語の良き精神が引き継がれて居りますし、敢て之を廃止するという考えは存しないのでございます。やがて是が亦祖国愛に伸びていくものと考えるのであります」と答弁していた。教育勅語の「祖国愛」が教育基本法の「人格の完成」に引き継がれたとは、誰が予想しただろうか。

長期に渡る保守政権のもとで、政府と文部官僚に「教育民主化」が「丁寧に」骨抜きにされてきた経緯が本書によって解明される。一方で著者は、戦前・戦中・戦後の現場の教員や生徒たちの心情と生活実態を記録することを忘れてはいない。

1932年生まれの吉岡数子の手記には「国民学校になっていちばん嫌だったのは、朝礼から下校まで、先生から何度も何度も『非国民』と叱られたことだった。『けがするのは非国民』『病気になるのも非国民、あなたたちは天皇陛下の赤子です。自分の体ではないのだから、けがや病気をしないように』とも言われた」と記録している。

1927年生まれの無著成恭は1948年に山形県の中学校に着任した。『天皇陛下のために死ぬことが悠久の大義』と教えられてきたが、敗戦後に『死

なくともよい』となっても、生き方が分からなかった。だが禅寺に育ったため、学校で『天皇陛下の赤子』と教わったと父に言うと、「いや違う、仏様の子だ」と言われた。それ以降、自分の生き方は自分で決める。その判断力を持つような教育をしなければならないと思った。

1911年生まれの土屋芳雄は1934年に関東軍憲兵となり、検挙した容疑者1,917人を拷問にかけ、328人を殺害した。戦後旧ソ連に戦犯として抑留され、1950年に旧「満州」撫順戦犯管理所に移された。1954年、ハルピンでの審議の際に王鴻恩の母親の手記を読む。「親一人子一人だった息子を土屋が逮捕し拷問にかけ、息子は出獄後に死亡した。土屋が殺したのだ。」と書かれていた。「一人でも多くを殺すこと、一人でも多く捕らえること、それだけを名誉として突っ走っていた。戦争のせいか、受けた教育が悪いのか、それもあるだろう。ではオレ自身に責任はないのか。そんなことはない」と自戒している。人の道徳観が変わるのは「道徳教育」に拠るものではなく、過酷な体験の中から自ら生まれてくるものであった。

1926年生まれの内田宣人は戦時の1944年に教員になった。「私は聖戦とか大東亜解放とかの理念を信じてはいなかった。同僚の教師の中にも狂信的な軍国主義者などはいなかった。だが、戦争賛美や軍国賛美にあふれた教科書を離れての授業はありえず、皇国史観の教科書以外に歴史を教える手がかりはなかった。高等科二年の男の子が満蒙開拓義勇軍への応募を執拗にすすめられて、泣いていたのを覚えている。体格のいい少年だが片足が短く、肩を激しく上下させて歩くのだった。恐らく学校に割り当てがきて、兵隊では役立ちそうでないその子に目星がつけられたのだろう」と内田が語っている。戦時中でも、国策道徳に従うのではなく、障害を持つ一人の生徒の心情に思いを寄せる教員がいたのだ。

1949年生まれの矢定洋一郎は公立中学に着任した。当校は文部省から「道徳」の研究指定を受け

ていた。彼は後に語っている。「ドートクの研究授業で、一時間中『雑巾を縫う』ってのをやって、校長が『なめんなー!』と真っ赤になって怒った。ボクもしばらくは、胃が重たい日々だったが、今思えば、青いながらよくやった! いや青いからこそやっちゃったのだな!?!』と述懐している。上からの命令で「道徳」を教えようとする校長を、庶民の生活感覚で「雑巾を縫う」実践的教育をしたら、見事に対立した。国定道徳と庶民の道徳の違いを学校で体現したわけだ。

この本を読みながら、評者はマーク・ゲイン著「ニッポン日記」の逸話を思いだした。1945年12月、彼は山形県酒田の一人の中学校校長に質問すると、学校の25名の教師が軍国主義教育をしたことを認めた。「それでは彼らが民主主義を日本の青年に教えることができるか」と聞いたら、彼は確信をもって答えた「もちろんです。東京からの命令が来次第!」と。

著者は終章の中で、「道徳の教科化にどう向き合うか」を提示している。政府が国定道徳を「抜け道」で指示したのであれば、現場の教員も国定からの「抜け道」を使えばよい。競争主義的教育と、一人の人間も切り捨てない教育は道徳が異なる。子どもの権利条約からすれば、子どものことは子どもが決める。戦時中の教員が教科書内容を教えた後に、ニヤッと笑うと、生徒は「あれは嘘らしい」と気づく。教材を区切り、その都度意見を出し合うと、様々な意見が出て、多様さを認める。通知表に道徳評価を記載する必要はない、道徳に関係する歴史的事実と社会について学べばよい、大戦直後の学校では、教員自身が作った「自主カリキュラム」の歴史から学ぶことが多い、等々様々な提言がある。

本書は詳細な資料を駆使した論文でありながら、道徳に関わる庶民生活や物語が示されていて、小説を読むような面白さがある。是非、現場の教員に読んで貰いたい。それに加え、植民地と戦争の歴史を反省しない「道徳教育」は、再び三度、過

ちを繰り返すことになるから、全ての人々の課題である。「自衛隊明記の憲法改正」の画策もある現在、より多くの人に必読の書となるべきだと思う。

(神奈川県高校教育会館 教育研究所
共同研究員 佐々木 賢)

*佐々木氏は、『教育×原発』『教育と格差社会』など著作があり、教育図書館には上記を含む7冊が所蔵されております。ぜひこの機会にお読みください。

最近の受入図書

(2019年3月～2019年6月受入)

【日教組刊行物】

『日教組七十年史』日本教職員組合編 2019.3
『日本の教育』第68集 日本教職員組合編著
2019.5

【教育総研・県教組刊行物】

『季刊フォーラム教育と文化』94号(2019 Winter) 教育文化総合研究所編 (株)アドバンテージサーバー 2019.3
『季刊フォーラム教育と文化』95号(2019 Spring) 教育文化総合研究所編 (株)アドバンテージサーバー 2019.4

【文部科学省刊行物】

『文部科学統計要覧』平成31年版(2019) 文部科学省著 株式会社ブルーホップ 2019.5

【平和教育】 【人権】

『原爆句抄』松尾あつゆき著・平田周編 書肆侃侃房 2015.3
『子どもとつくる平和の教室』小藺崇明、渡辺哲郎、和田悠編著 はるか書房 2019.1

【社会・歴史・教育】

『梅根悟』中野光著 新評論 2019.3

『文部科学省の解剖』青木栄一編著 東信堂 2019.3

『わかる！ 小学校の先生のための統計教育入門』坂谷内勝著 ミネルヴァ書房 2019.3

『くわしすぎる教育勅語』高橋陽一著 太郎次郎社エディタス 2019.1

『スクールロイヤーにできること』ストップいじめ！ナビスクールロイヤーチーム編 日本評論社 2019.2

『脳を傷つけない子育て』友田明美著 河出書房新社 2019.2

『近代日本における「受験」の成立』吉野剛弘著 ミネルヴァ書房 2019.3

『不登校論の研究』山岸竜治著 批評社 2018.1

『教科書では学べない数学的思考』ジョン・メイソン、リオン・バートンほか著 吉田新一郎訳 新評論 2019.2

『教育激変』池上彰、佐藤優著 中央公論社 2019.4

『子どもにスマホをもたせたら』デボラ・ハイトナー著、星野靖子訳 NTT出版 2019.1

『子どもの人権をまもるために』木村草太編 晶文社 2018.2

『置き去りにされた高校生たち』朝比奈なを著 学事出版 2019.3

『父が娘に語る美しく、深く、壮大で、とんでもなくわかりやすい経済の話』ヤニス・バルファキス著、関美和訳 2019.3

『「空気」を読んでも従わない』鴻上尚史著 岩波書店 2019.4

『フォッサマグナ』藤岡換太郎著 講談社 2018.8

『「なんでも学べる学校図書館」をつくる』片岡則夫編著 少年写真新聞社 2017.1

『「学校」をつくり直す』苫野一徳著 河出書房新社 2019.3

『梅原猛の「歎異抄」入門』梅原猛著 プレジデント 2019.2

『最新版 労働法のしくみと仕事ができる本』 向井蘭著 日本実業出版社 2019.3
『教えない授業』 鈴木有紀著 英治出版 2019.4
『道徳教育と愛国心』 大森直樹著 岩波書店 2018.9
『FACTFULNESS』 ハンス・ロスリング、オーラ・ロスリング、アンナ・ロスリング・ロンランド著、上杉周作、関美和訳 日経BP社 2019.1
『「学校経営マダラート」で創る新しいカリキュラム・マネジメント』 大谷俊彦著 ぎょうせい 2019.1
『中高生からの論文入門』 小笠原喜康、片岡則夫著 講談社 2019.1
『国際線機長の危機対応力』 横田友宏著 PHP研究所 2019.1
『改訂6版 36協定締結の手引』 労働調査会出版局 労働調査会 2019.3
『英単語の語源図鑑』 清水建二、すずきひろし著、本間昭文イラスト かんき出版 2018.5
『子どもには、どんどん失敗させなさい』 水野達朗著・文・その他 PHP研究所 2019.4
『ミスマッチをなくす進路指導』 倉部史記著 ぎょうせい 2019.4
『暴走する能力主義』 中村高康著 筑摩書房 2018.6
『教師の学び方』 澤井陽介著 東洋館出版社 2019.3
『安倍官邸VS.NHK』 相澤冬樹著 文藝春秋 2018.12
『KGBスパイ式記憶術』 デニス・ブーキン、カミール・グーリーイェヴ著、岡本麻左子訳 水王舎 2019.2
『歴史戦と思想戦』 山崎雅弘著 集英社 2019.5
『ユダヤ商人と貨幣・金融の世界史』 宮崎正勝著 原書房 2019.3

【家庭・芸術・趣味・文学一般 ほか】

『そして、バトンは渡された』 瀬尾まいこ著 文藝春秋 2018.2
『愛なき世界』 三浦しをん著 中央公論新社 2018.9
『55歳からの時間管理術』 齋藤孝著・その他 NHK出版 2019.5
『フーガはユーガ』 伊坂幸太郎著 実業之日本社 2018.11
『シーソーモンスター』 伊坂幸太郎著 中央公論新社 2019.4
『胎児のはなし』 増崎英明、最相葉月著 ミシマ社 2019.2
『怒らないコツ』 植西聰著 自由国民 2018
『たとえる力で人生は変わる』 井上大輔著 宣伝会議 2019.2
『くいのちとがん』 坂井律子著 岩波書店 2019.2
『知的雑談術』 吉田裕子著 日本実業出版社 2019.4
『万引き家族』 是枝裕和著 宝島社 2019.4
『辺境メシ』 高野秀行著 文藝春秋 2018.1
『親に壊された心の治し方』 藤木美奈子著 講談社 2017.1
『どん底に落ちてもはい上がる37のストーリー』 生島ヒロシ著 ゴマブックス 2019.4
『あちらにいる鬼』 井上荒野著 朝日新聞出版 2019.2
『ノースライト』 横山秀夫著 新潮社 2019.2

編集後記

4月から開館日が週3日（火）・（水）・（木）になりました。一人体制ですが、なるべく利用しやすい環境づくりを工夫したいと思っています。リクエスト、ご意見等よろしくお願ひいたします。本から学び、資料からさまざまな事象を読み取り、研究されている方々、そのお手伝いができればと思っています。（川内）

教育図書館案内

- * 開館日：火・水・木
(2019年4月から変更になりました。)
- * 開館時間：10：00 ～ 16：30
- * 蔵書の貸出
貸出冊数：5冊／貸出期間：3週間
(利用者登録が必要です。)
- * 閉館時返却方法
図書館入口前の「ブック・ポスト」をご利用下さい。
- * レファレンス・サービス
当館所蔵の図書・雑誌、その他教育に関するお問い合わせに対応しています。
- * コピー：白黒1枚10円／カラー30円

特別コーナー

- 平和資料コーナー：
反核（原発関連を含む）・平和運動、平和教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー：
日教組教育新聞・雑誌（「教育評論」「月刊JTU」など）、教育政策、教育課程、教科書問題、各部の図書・資料など
- 教育総研刊行物コーナー：
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書など このほか旧国民教育研究所時代の刊行物も含む
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物：
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導要領、指導書など
- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書

- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書
- 人権・防災・減災コーナー

蔵書の特徴

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 蔵書数 約68,000冊（2018年9月現在）
- 教育図書館のホームページの蔵書検索の画面から検索できます。
(<https://ilisod001.apsel.jp/kyoikutoshokan.lib/wop/pc/pages/TopPage.jsp>)
- 千代田区立図書館のホームページ「大学・専門図書館横断検索」からも教育図書館の蔵書が検索できます。

交通案内

- 神保町駅 A1出口より徒歩3分
- 九段下駅 6番出口より徒歩7分
- 竹橋駅 1b出口より徒歩5分
- 水道橋駅西口 徒歩12分（JR総武線）

